過敏型自己愛傾向における甘えの認知評価 とストレス対処に関する研究

—根拠なき楽観性と攻撃行動—

○佐藤勝義・岩永 誠

(広島大学大学院総合科学研究科)

キーワード：過敏型自己愛傾向、認知評価と対処、甘え

Cognitive appraisal of emotional dependency (“amae”) and stress coping in hypervigilant narcissistic personality

Katsuyoshi SATO and Makoto IWANAGA

(Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University)

Key Words: Hypervigilant narcissistic personality, cognitive appraisal and stress coping, emotional dependency (“amae”)

目 的

近年の若者の特徴として、自由や気楽さを志向する一方で、社会的な責任を回避する傾向があげられ(小杉, 2003), 誇大な自己認識を持ち自己中心的な性格傾向である自己愛との関係が議論されている。自己愛は、無関心型と誇大型に大別される(Gabbard, 1989)。過敏型は、誇大な自己評価により根拠なき楽観的認知を示す(前田, 2005)一方で、否定的な評価に対して自己評価がゆらぎやすく(上地・宮下, 2005), 自己評価が傷つけられるような状況からは回避的傾向を示すとされている(DSM-IV; APA, 1994)。過敏型自己愛が、他者からの評価に過敏であるにもかかわらず、楽観的であることの説明は十分になされているわけではない。また、根拠なき楽観性が引き起こされるメカニズムについても、脅威性評価に歪みが生じているか、もしくは対処可能性評価に歪みが生じているのかという点も明らかにされていない。そこで本研究はLazarus & Folkman (1984)の認知評価理論に基づき、過敏型自己愛の認知評価の歪みについて検討することを目的とした。過敏型自己愛は、他者の評価に過敏に反応することから(Gabbard, 1994), 脅威性評価は高いと考えられる。また、過敏型自己愛の本質は、特権意識から生じる一方的で要求がましい甘えであると考えられることから(稲垣, 2007), 甘えが困難な場面であっても甘えが受け入れられて当然であり、他者が対処してくれる(他力制御可能性)と認知している可能性が考えられる。しかも、甘えが困難あるいは拒否される場面では、不満や怒りが生じて攻撃性が高まる可能性が考えられる。

本研究は、順次に甘えられなくなる状況操作を行ない、過敏型自己愛傾向者の行う認知評価や対処を測定し、根拠なき楽観的認知や攻撃行動が生じるのかを検討する。

方 法

分析対象者 大学生 55 名(男性 19 名, 女性 36 名, $M=19.4\pm0.48$ 歳)。過敏型自己愛を測定する自己愛的脆弱性尺度(16 項目, 5 件法(1-5))より上位 25%である合計 63 点以上を高群(27 名), 下位 25%である合計 43 点以下を低群(28 名)とした($t(53)=23.77, p<.001$)。

実験デザイン 過敏型(2: 高 / 低, 参加者間) $\times$ 場面操作(6: ベースライン(1 カ月前) / 時間切迫小(1 週間前) / 時間切迫大(前日) / 困難行動(前日) / 拒否(前日) / テスト失敗(後日), 参加者内)

場面操作 河野(2007)の甘え欲求生起の刺激文を参考にした。単位取得の困難なテストのためノートを借りる必要がある状況で、時間切迫によりストレスを操作し、以下の 6 場面を設定した。テストの①1 カ月前, ②1 週間前, ③前日, さらに、④ノートを借りる予定の人物が他者にノートを貸したことによる困難行動場面, ⑤ノートを借りることを拒否された拒否場面。最後に後日, ⑥実際にテストに失敗した場面, とした。

手続き 実験は個別もしくは集団(1~6 人)で行い、その場面に

相当するシナリオをスクリーンに提示し、場面ごとに状態質問紙に回答してもらった。場面は徐々に甘えられなくなるように設定した。

測定指標 (1)テストへの脅威性評価(尾関(1993)を参考に作成), (2)テストへの他力制御可能性(尾関(1993)を参考に作成), (3)攻撃行動(阿部・高木(2006)を参考に)について単極 6 件法(1-6)で測定した。

結 果

脅威性：場面の主効果($F(4, 212)=91.49, p<.001, \eta^2=.63$)が認められ、甘えられなくなることで脅威性は高まった。自己愛の主効果($F(1, 53)=5.23, p<.05, \eta^2=.09$)が認められ、自己愛高群は低群よりも脅威的であると認知した。**他力制御可能性**：場面の主効果($F(4, 212)=46.04, p<.001, \eta^2=.47$)が認められ、甘えられなくなることで他力制御可能性が低下した。自己愛の主効果($F(1, 53)=5.06, p<.05, \eta^2=.09$)が認められ、自己愛高群は低群よりも他者が対処してくれると考えていることが示された。**攻撃行動**：場面の主効果($F(3, 159)=31.96, p<.001, \eta^2=.38$)が認められ、自己愛の主効果($F(1, 53)=21.32, p<.001, \eta^2=.29$)が認められ、場面 $\times$ 自己愛の交互作用が認められ、自己愛高群において場面の単純主効果が有意であり($F(3, 51)=26.84, p<.001, \eta^2=.61$), 全ての場面において自己愛高群は低群よりも攻撃行動が高まった($F_s(1, 53)=5.52\sim29.20, p<.05\sim.001, \eta^2=.09\sim.36$)。

考 察

自己愛高群は、低群よりも脅威性評価が高い一方で、他力制御可能性も高く認知していた。このことは、脅威性を意識しつつも他者に頼ることで、楽観的な認知を行っている可能性を意味する。ただ、1 カ月前のベースラインであっても、自己愛高群は他力制御可能性が高いことから、最初から他者に依存する傾向があると考えられる。過敏型自己愛傾向者は、普段からあえて自分で問題解決せず、他者に解決を依存することで、失敗したときの自己責任から回避していると考えられる(前田, 2005)。また、自己愛高群は、場面が進むにつれて他力制御可能性は低下するものの攻撃性が高まっている。これは、他者に受け入れられないことから不満が生じ、攻撃性が生じた可能性が考えられ、過敏型自己愛の問題解決的対処が行なえない未熟さが考えられる。

Fig.1 自己愛における他力制御可能性

Fig.2 自己愛における攻撃行動